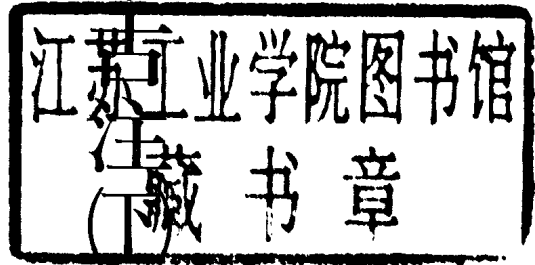


拾遺愚草古注(下)

石川常彦校注

拾遺愚草



中世の文学
三弥井書店刊

拾遺愚草古注(下) 中世の文学

定価 九、〇〇〇円(本体 八七三八円)

平成元年六月一六日 初版第一刷発行

◎校注者 石川 常彦

発行者 吉田 榮治

製版所 第二整版

東京都港区三田 三二一三九

発行所 株式会社 三弥井書店

電話東京(〇三)四五二一八〇六九
振替口座 東京九一二一二五番

目次

拾遺愚草俟後抄	1
第一冊	5
第二冊	83
第三冊	162
第四冊	321
拾遺愚草諸注番号一覧表	465
終りに	500
(島津忠夫)	

拾遺愚草俟後抄

凡 例

一、底本は国立国会図書館蔵本である。

二、同本の内容および表記の概要は次のようである。

内容は、「初学百首」などの見出し・「春」などの部類・歌本文など加注対象としての拾遺愚草の本文に相当する部分、それに対して加えられた注文部、注文部に加えられた加筆訂正の朱記部、同様墨記部の四種に分けられる。表記は一面九行書きを原則とし、歌本文一行書き（原則として上句のみ記す）、それに二字下げて注文を記し、「初学百首」「春」などの見出し・部類などの位置は必ずしも一貫していない。加筆補訂部の朱墨両注は原則として行間または余白に細字で記されるが、そうでない場合も多い。字体の大小については、拾遺愚草本文に相当する部分の割注相当部および朱墨による注の加筆補訂部が原則として細字であるが、不分明な場合もままある。右の状況から、翻字に際して次のように処置した。

三、拾遺愚草本文相当部

イ 見出し・部類・題の位置については、底本で最も普通の位置、即ち、見出しは歌本文と同じ、部類は二字下げ、題は三字下げを一往の原則とし、それに外れる場合は頭注に注記した。

ロ 「二見浦百首 文治二年 侍従 廿四歳」などの字体の大小については、明白に区別できるものは底本のままの大きさで示し、曖昧な場合は一往、本来あるべき大きさで示して頭注に記した。

ハ 「春」また「二十首」など、本来あるべき事項が記されていない場合は、それを書陵部蔵冷泉為村筆本によつて（ ）内に入れて示した。

ニ 歌本文を底本は原則として上句しか記さないが、注文理解の便宜のために為村筆本により、（ ）内に入れて全文を示した。

ホ 歌本文また歌の掲載順が為村筆本と相違する場合、必要なものを頭注に記した。
原注文部

へ 拾遺愚草本文部と同大の字で示した。

ト 底本の大体がそうであるので、歌本文より二字下げて記した。

チ この部分の行間は次の理由で底本の形態と一致しない場合がある。その表示は甚だ困難なので、表示を断念した。

i 原本は当部が整然と記され、その行間・余白に加筆補訂部が記入されたものであろうが、底本は加筆補訂部が多量の場合に、まま行間を拡げていて定まらない。

ii 翻字印刷の都合上、加筆補訂部の位置・量によって、行間を動かさなければ補訂部を収めきれない場合がある。

加筆補訂注部

リ 朱・墨両記であるが、共に字体を小さくすることで前二項と区別した。特に前二項部について、前二項原筆者自身による補訂がありうるはずであり、それは加筆補訂墨記者とは区別さるべきであるが、底本は前二項部・当部も含めて全文同一筆と見られ、事実上その区別は不可能に近い。従って共に加筆補訂墨記としての形式で表示される。

ヌ 加筆補訂注の朱書は字体を小さくすることで、墨書はその部分を「」で囲むことで表示した。

ル 加筆補訂注の記されている位置は、できるだけ底本に即するよう心がけたが、印刷の都合上必ずしも正確とは言えないので、加注の最初の一字の位置だけは底本のそれと一致するようにし、必要に応じて頭注に注記した。本文の右傍・左傍なども字数が少ない場合はできるだけ底本のまますを示すよう努めた。

ヲ 抹消記号の場合、みせけちはそのまま示したが、行の中央部に引線したものについては、朱線の場合は左傍実線、墨線の場合は右傍破線で示した。

以上のすべてを通じて、次のようにした。

ワ 漢文付訓など以外、通常文中のかたかなをひらがなに直した。

カ 漢字・かなの字体は通行の形に改めた。

ヨ 私解に基づいて句読清濁を施した。

四、歌頭に一連番号を付した。但し、一連番号は、底本が全歌注であるところから、欠脱歌にも番号を付し、掲載順に異同があるときは妥当と判断した順の番号を付し、共に頭注に説明を加えた。底本の拾遺愚草相当部が最も近いと思われる書陵部蔵為村筆本拾遺愚草と比較して、欠脱歌は三五・三六・一三二五の三首、順不同は一一四七・一三二六・一四三二の各前後の三箇所であるが、一一四七・一四三二の二箇所は為村筆本に順序訂正の記号があり、それに従えば当底本と同一順となる。一三二六は当底本の独自異順と見られるので逆順の番号を付した。

五、頭注は底本の本文に関する説明を中心とし、次に注釈文中所引部の出典などを記し、本歌・参考歌・句切などについて簡単に注記した。

付記 原稿の調整および校正には、島津忠夫、上條彰次、矢野貫一、赤瀬信吾が当った。

拾遺愚草俟後抄

初学百首 養和元

侍従

1 続千載・春・巻頭に入る。

1 出る日のおなじ光によもの海の（浪にもけふや春はたつらむ）

日光のてらさずといふことなきがごとくに、今日の立春も又、四海の波上までも同時にへだてなくいたるべき事をいへり。誠に巻頭めき大きな歌也。

2 1 「みたて」の右傍に「さだめ」と記し、「みたて」以下に抹消記号はないが、「みたてたるは」を抹消して、「とまりとさだめて」と読むべきものであらう。

「愚草員外雑歌部の「韻字四季歌」の末に「自文治建久以来称新儀非拙達磨歌為天下真賤被愚已欲被棄置」という定家自身の識語があるが、それによつたもの。

2 朝がすみへだつるからに春めくは（と山や冬のとまりなるらむ）

寒風はげしく外山のさだ／＼と見えしときは春とも見えざりし

に、朝霞の外山をふかくへだてゝよりのどやかに春めきたるは、

外山こそ冬のとまり所なるらんと也。かすみて春めきたるとはみずして、昨日寒風はげしかりし

定家卿の歌なればとてかやうの趣向はまなぶべき事にもあらざる

か。されども、人の思ひよりがたき所也。初学より如此なべてな

らざる思ひよりみたて、その心志各別也。誠に末代までの師範と

今にあふがるゝ所こゝに見えたり。又、新義達磨風とて、一旦その世に棄捐せられたる所も此所なるべし。

3 鶯のはつねを松にさそはれて（はるけきのべに千世もへぬべし）

鶯のはつねに子日をもたせ、松を待心にして云り。心は異なる事なし。

4 「鶯のたによりいづるこゑなくは春くることとをたれかしらまし」（古今・春上・一四・千里）を校註国歌大系の頭注は「春のしるべ」を「梅のしるべ」としたとして掲げる。

5 「参考」花盛り春の山辺を見渡せば空さへ匂ふ心地こそすれ（千載・春上・五一・師通）

6 「校註国歌大系頭注は「春の夜のやみはやなし梅の花色こそ見えぬかやはかくる（古今・春上・四一・躬恒）」を一步進めたものとして掲げる。

5 梅花梢をなべて吹風に（そらさへ匂ふはるのあけぼの）

梅花ざかりに、よもの花の梢ををしなべて吹かせなれば、「そらさへにほふ」といへり。

6 中／＼にもに匂へる梅花（たづねぞわぶる夜半の木のもと）

「中／＼は」、却而などいふ詞^{心に}、けつくといふやうの詞也。梅花の四方に匂へば、けつく、そこよるの木のもととはわきがたくて、たづねわぶる也。

7 春雨のはれ行そらに風ふけば（くもとゝもにもかへる雁かな）

8「摘抄」一番では「関にふる」「しほとぬる」と加注。

9「たかきの（山）、大和・高城（八雲御抄）。参考「たづねつる花さきにけりみよしのたかきのやまにかかるしらくも（治承二年重保別雷社歌合・隆信）」。

10「C注」一番・E注二番注参照。

雲ははるれば風につれて山へかへる物なる故、「雲とゝもにかへる雁哉」といへり。今、雲につらねてかへるを見ていへり。

8 春雨のしく／＼ふればいなむしろ（庭にみだるゝ青柳のいと）

「しく／＼ふる」は、そぼふる雨也。柳はいなむしろにたとへいへり。「薤」より「しく／＼」といへる也。雨に色そひ、みどりそふ心にや。

9 よしの山たか木の桜咲そめて（色たちまさる峯のしら雲）

「たかき」は、たかきの山也。「たかき」といへるより「色たちまさる」といへり。

10 花ゆへにおなじうき世ぞおしまるゝ（おなじ山ぢにふみまどへども）

〔春は〕
〔ヒヒヒ〕
常に山中に分入ては、あはれ世をものがれ、かやうの山中の住居もせまほしく思ひつねにはうき世をいとひて山にも入らむとおもへども、あらまして、うき世をおしむ心はなき也。花ゆへに分まよふ山ぢは、花に食着する心より、ばかりにて過行ば、ふみまどひたる也。春になりて、分入てふみうき世をいとふ心はなく、かへりてうき世のおしまるゝといへるにや。
まよふも又おなじ山路なれども、花ゆへの山ぢは猶うき世のおなじきこゝろなるべき歟。

11 いにしへの人に見せばやさくら花（誰もさこそは思ひをきけめ）

花をみる心のあかぬあまりに、みぬ行末まで思ひやらるれば、その心より、昔人もさこそわがごとく思をきけめ、そのいにしへの人に見せばやといへる也。

12 梓弓はるはるは山路も程ぞなき（花の句ひをたづね入とて）

花を尋る心から。おぼえず分入と也。
はるけき山ちをも て程なきやうに覺ゆると也。

12「梓弓春の山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける（古今・春下・一一五・貫之）」の影響あるか。

13 年をへておなじ梢に咲花の（などためしなきにほひなるらむ）

年々おなじこずゑの花なればかはる事もあるまじきに、毎度たぐひなきやうにめづらしくみる心也。「ためしなき」といふより、「おなじ梢」といへり。

14 都辺はなべてにしきと成にけり（さくらをうらぬ人しなれば）

咲たる花をにしきといへるにはあらず。折かざしもてあそびて行かへる人のおほき体なるべし。

14「みやこへ」意識的な万葉語の試用か。愚草中にもこの一例のみ。

15 中くにおしきもとめじ我ならで（見る人もなきやどのさくら）

あらは也。中くには却而也。数ならぬ我身のみならでみる人もなき桜はおしきもとめじと也。かくいへるは、問人のなきやどをふかくうらみたる心也。

16 一 C 注二・摘抄三番注参照。

16 風ならで心とをちれさくら花（うきふしにだに思ひをくべく）

桜の心からちるならば、桜をうきにうらみをくべき也。風のさそふやうなれば、ちる事さへ桜のとがにはなさで、桜のつらからぬはうるさき也。

17 春のゝにはなるゝ駒は雪とのみ（ちりかふ花に人やまどへる）

老馬知^ニ道ノ故事也。花の雪のごとくにちれば、みちをうしなへる人のゆへ、駒をはなちてみちしるべにしたる歟と也。

17 一 参考「春ののにわかなつまむとこし物をちりかふ花に道はまどひぬ（古今・春下・一一六・貫之）」。
二 「管仲・隰朋從於桓公而伐孤竹、春往冬反、迷惑失道、管仲曰、老馬之智可用也、乃放老馬而隨之、遂得道行（韓非子・說林上）」。老馬之智ともいう。

18 一 参考「水上にもみぢ流れて大井河むらごにみゆるたきの白いと（後拾・秋下・三六四・堀河右大臣）」。

18 水上に花やちるらんよしの山（にはひをそふるたきの白いと）

きこえたる分也。

〔此「匂ひ」、尤花の香の事ながら、滝の風景をそへたる心あれば、色の匂ひをもそふる心もあるべき歟。〕

19 をしなべてみねの桜やちりぬらん（白たへになるよもの山かぜ）

同前。（四方の山風白妙になる程に「をしなべて」といへり。）

20 うらみてもかひこそなけれ行春の（かへるかたをばそことしらねば）

同前。

花さそふ風のやどりはたれかしる我にをしへよいてうらみむといへる
歌を下にもちてかくよめる歟。春の行衛をしらざれば行てはうらみぬ
程に、かひなしといへるにや。
但、これは過たる義理なるべき歟。

夏十首

21 おしむにも心なるべきたもとさへ（花のなごりはとまらざるらむ）

「心なるべき」、こゝろまかせなるべき也。それさへ今日の礼義は人々

更表して
によりて改たる也。「らん」といへるは、我うへばかりの事にはあらず、をし

なべて袖ごとに花のなごりはとまらずといへる心なるべき
歟。

22 卯花によるの光をてらさせて（月にかはらぬ玉川のさと）

あらはなり。

20 古今・春下・七六・素性。初句「花ちらす」、五句「行きてうらみむ」。

23 一 参考「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今・夏・一三九・不知）。
二「霍公鳥花橘の枝に居て鳴きとよもせば花は散りつつ（万葉・一九五〇）」「やどりせし花橘もかれなくなどほととぎすこゑたえぬらむ（古今・夏・一五五・千里）」など、橘と郭公との結合は一般的。

25 一 参考「五月やみくらぶのやまのほととぎす声はさやけきものにざりける（顕季集）」「まぢかねてくらぶのやまのたそがれにほのかになるほととぎすかな（保安二・関五・二六・内蔵頭長実歌合）」。

26 一 「は心」と読める字であるが、「は」不要か。

27 一 「世中はなにかつねなるあすかがはきのふ

23 とどめをきしうつりがならぬ橘に（まづこひらるゝほととぎすかな）
橘は袖の香をうつしたるより昔をもこふる也。郭公のうつり香をとどめ置たる橘にもあらぬに、此はなを見ては郭公をこひらるゝと也。橘は郭公に縁のあるものなればなり。

24 たち花の花ちる風にあらねども（ふくにはかほるあやめ草哉）
「ふく」といへるによりて、風に比してあやめの軒ばあやめをにふくより、かほる事をいへり。

25 五月やみくらぶの山のほととぎす（ほのかなるねにる物ぞなき）
「くらぶ」といふより「ほのかなる」といへる歟。

26 すぎぬるをうらみははてじ郭公（なきゆくかたに人もまつらむ）
鳴行かたに又日比をへて待人もあるべし。されば鳴ずてすぎぬるを賣着してうらみははてじと也。他人の待わぶるは心1を思やりたる心おもしろくや。

27 五月雨にけふも暮ぬるあすか河（いとふちせやかはりはつらん）

のふちぞけふはせになる（古今・雑下・九三三・不知）。

28 参考「みづなみのもらでのこるとみえつるはあじろにひをのよるにぞありける（堀川百首・網代・隆源）」「我妹子が上裳の裾のみづなみに今朝こそ冬は立ち初めけれ（千載・冬・三九三・小大進）」。

29 参考「いかだしのとかはをくだすみなれさほあけつるままにくれをまつかな（堀河百首・後朝・匡房）」。

「常だに瀧瀬のかはる河なれば、ふりつゞきたる五月雨の水の勢にはいよく瀧瀬もかはるべしと也。」

28 五月雨に水なみまさるまこも草（みじかくてのみあくる夏の夜）

「水なみ」は水浪歟。又、水並歟、水のなみか、可尋之。歌のころは水かさのやうにきこゆる歟。されども水並とよめる歌、又不見及。

29 杣川やうきねになるゝいかだしは（夏の暮こそすゝしかるらめ）

いかだしは常にうきねになれたるもの也。されども、夏のくれは何方よりも河辺水上すゝしかるべきと察したる也。「うきね」といふより「くれこそ」といへり。筏にはくれといふことをよめる也。「くれ」は櫂也。丸木ヲ云也。

30 夏の日の入山みちをしるべにて（松の梢に秋風ぞふく）

夏の日を入をしるべにして秋風の吹と也。「夏の日の入」といふより「秋

風」は出たる也。

秋二十首

32 参考「わぎもこにあふさか山のほとゝぎすあくればかへるそらになくなり（金葉・夏・一二四・定信）」。

33 風雅・秋上・四六九に入集。

34 参考「涙河ながすねぞめもある物をはらふ許のつゆやなになり（堀河本Ⅱになる）（後撰・恋三・七七二・不知）」。

35 底本、該当歌・注文ともになし。
一 あるいは「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里（千載・秋上・二五八・俊成）」の影響あるか。

36 底本、該当歌・注文ともになし。
一 風雅・秋中・五八二に入集。参考「やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋は来にけり（拾遺・秋・一四〇・惠慶）」。「あきはきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし（古今・秋下・二八七・不知）」。

31 をしなべてかはる色をばをきながら（秋をしらす荻の上風）
肅殺氣にて万物色かはる、それをゝきながら荻のみ秋をしらすと也。

32 うらみをやたちそへつらん織女の（あくればかへる雲の衣に）
無殊事。「衣」といふより「立そへつらむ」は出たり。

33 風ふけば枝もとをゝにをく露の（ちるさへおしき秋はぎの花）
無殊事。

34 女郎花露ぞこぼるゝをきふしに（契りそめてし風や色なる）
「風や色なる」は、色／＼なる也。それを色めかしきにいひなせり。契りし風の色めかしきゆへ、女郎花は露をこぼすかといへり。

35 露ふかきはぎの下葉に月さえて小鹿なく也秋の山ざと

36 つきかげをむぐらのかどにさしそへて秋こそきたれとふ人はなし